

ボリシェヴィキとツインメルヴァルト運動

——一九一七年三月—二月——

山内 昭 人

【要約】 一九一五年九月に出発した国際反戦社会主義運動であるツインメルヴァルト運動は、ロシア二月革命後の国際情勢の急変に伴って新展開していった。その一七年以後（コミンテルン創設まで）の運動を包括的に研究する際、正面から取り組まざるをえないレーニンのツインメルヴァルトからの即時離脱論がある。彼によるとツインメルヴァルトは破産したし、第三インターは理念的には国際主義者によって既に創立されていた。が、当時ボリシェヴィキはレーニンの主張を支持しなかった。その上、その国際主義者との接触を一手に担っていたストックホルムの在外代表部の活動こそ左派糾合の、ひいては第三インター創設の鍵を握っていたが、彼らもレーニンのその論に与さなかった。彼らは当時新インター創設の唯一の可能性をツインメルヴァルトにみていた。それはその運動の国際社会主義左派運動における意義を明示していたとともに、他方、在外代表部の、ひいてはそれを窓口としたボリシェヴィキの左派陣営への影響力の弱さにかかわっていた。

史料 五九巻五号 一九三六年九月

まえがき

大戦以来、三度目の冬を迎えたヨーロッパは戦争による疲弊を極度に高まらせつつあった。かかる時ロシアに革命が起った。ペトログラード・ソヴェトは「平和のための断乎たる共同行動」を「全世界の諸国民へ」訴える平和声明を發した。ロシア二月革命は各社会主義陣営の平和運動推進の導火線となった。

ソヴェトの平和声明は、第二インターの執行機関であるB S I (Bureau Socialiste International) へ大戦中再三国際会

議召集を要求し、その都度無視されてきた中立国社会主義者を勇気づけた。オランダとスカンジナビア諸国の社会主義者を中心に現下の国際情勢と平和問題を討議するため国際社会主義会議、いわゆるストックホルム会議開催がめざされていった。そして、この動きは七月に入ってソヴェト代表との共同下に新たに促進されることになる。

他方、一九一五年九月に一ヶ国から四〇名近い社会主義者がスイスの一寒村ツィンメルヴァルトに集まり大戦勃発以来初めて実現された大規模な国際社会主義反戦会議に端を発するツィンメルヴァルト運動にも、二月革命は新しい地平を切り開いた。ムルンにあったツィンメルヴァルト（紙幅の関係から以下Zと略記させてもらう）の執行機関ISK (Internationale Socialistische Kommission) はこの歴史的現場に少しでも近づくためISKをストックホルムへ移し、そしてその地で自らの陣営の国際会議、第三回Z会議を平和問題とオランダ社会主義者らによって呼びかけられたストックホルム会議へのZの態度問題を討議するために開くことをめざしていく。

一七年半ばのヨーロッパ社会主義運動はかかる二つの国際社会主義会議開催をめぐる動きを中心に展開されていった。そして、Z運動もこの国際情勢の急転下に新たな対応に迫られることになった。

本稿はこの二月革命後のISKを中心としたZ運動の包括的評価を下すための予備研究であり、その評価を下す際どうしても正面から取り組まざるをえないレーニンのZ運動に対する評価についての試論である。

ここで簡単に史料等に触れておけば、Z運動全体に関しては、ISK書記であったバラバノフの史料集と近年公刊されたプロトコールを含むラーデマハー編集のもの、そして一九四〇年のものながら今日なお最もバランスのとれた包括的な記述をなしているガンキンとフィシャールの史料集兼研究書が第一に挙げられる^①。が、以下検討する一七年段階のZ運動については、ISK機関紙の他はバラバノフの教種の回想録^②をはじめ当事者の回想等に頼らざるをえないほど史料に欠ける現状である。そして、この時期の「ポリシエヴィキとZ運動」については、ライスベルクや、モスクワのマルクス・レーニン研究所アルヒーフを利用しえたコロレフ、サムイロフ、ヴォロプツォヴァ、チョムキン、カルリネルら共産圏史家

の研究がある。^① とりわけ、チョムキンとヴォロポソヴァの研究は本稿が大いに負ったものであるとともに、他面、対峙しなければならなかったものである。

① A. Balabanoff, "Die Zimmerwalder Bewegung 1914-1919", Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XII (1926), 310-413; XIII (1927), 232-84; H. Lademascher (Hrsg.), Die Zimmerwalder Bewegung, Protokolle und Korrespondenz, I-II (The Hague/Paris, 1967); O. H. Gankin, H. H. Fisher, The Bolsheviks and the World War. The Origin of the Third International (Stanford, 1940 [1960]).

② Internationale sozialistische Kommission, Nachrichtendienst (Stockholm), No. 1-44, 6. V. 1917-I. IX. 1918.

③ A. Balaганова, Из лучших воспоминаний Циммервальда (Л.-М., 1925); Erinnerungen und Erlebnisse (Wittenberg, 1927); My Life as a Rebel (New York/London, 1938) [New York, 1968].

一 レーニンの即時離脱論

レーニンがZからの即時離脱を断乎主張するに至った主要因は、一六年末から二月革命直前にかけてのISKのリーダー・グリムラスイス社会民主党指導者との決定的な対立にあった。^① 二月末には「総括。Z主義はスイスの党の指導者たちによっておごそかに「沼地」の中へ葬りさられた」とレーニンは書いた。^② ここに彼によるZ「破産」宣告がなされた。

四月二三日、彼は「Zの沼地をこれ以上辛抱することはできない」、「Zにはただ情報を得る目的のみとどまるべきであ」り、「新しい革命的なプロレタリア的インタナショナルを創立しなければならない」と『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務』の中に記した。^③ ここで本稿の展開上注意すべきは、レーニンによると「より正確にいえば、インタ

④ A. Reisberg, Lenin und die Zimmerwalder Bewegung (Berlin, 1966); Н. Е. Корольев, "В. И. Ленин и Циммервальдское объединение (февраль-октябрь 1917 года)", Вопросы истории КПСС, 1960, No. 2, 139-55; И. Самуилов, События в борьбе за нов ирреволюционная Партия на реченье социалстов и Циммервальдского объединения (София, 1964); Ю. И. Воробцова, "Заграничное представительство ЦК РСДРП(б) в 1917 г.", Вопросы истории КПСС, 1966, No. 6, 30-8; Воробцова, Деятельность представительства ЦК РСДРП(б) в Стокгольме (апрель-ноябрь 1917 г.) (М., 1968); Я. Г. Темкин, Ленин и международная социал-демократия, 1914-1917 (М., 1968); М. М. Карпинер, "На рубеже новой эры", Ленин в борьбе за революционный Интернационал (М., 1970), 361-96.

ナショナルはすでに創立されており、^④ 各国で反戦、社会主義運動を貫き通している「実際の国際主義者たち」のインテリがそれであるという認識である。

四月協議会(後述)を経て彼の即時離脱論は増々強固に打ち出されてきた。彼はストックホルムの在外代表部へ再三左派だけの国際会議を全力をあげて実現させることを要求した。^⑤ このような時レーニンらを地下潜行へと追いやることになる七月事件が起こった。

七月事件はレーニンの主張に拍車をかけることになった。彼の判断は「ロシアに二〇万人(二五万人)以上を擁する合法的(ほとんど合法的な)な国際主義的な党がまだ存在しているあいだは、われわれの義務は左派の会議を召集することだ。そして、もしわれわれがその召集におくれるなら(ロシアのポリシエヴィキ党は日にますます地下に追いこまれている)、われわれはまったく犯罪者となるだろう」ということだった。注意すべきは、ここに今召集しておかなければそれがいつになるかわからぬとの危惧が読みとれることだ。だからこそレーニンは、もはやその会議への「参加人員」の問題ではなく「思想的な勢力」として「少数」の会議で十分と考えた。「ポリシエヴィキ、ポーランド社会民主党、オランダ人、『アルバイター・ポリティーク』、『ドゥマン』——これだけでも十分な中核である」と彼は断言した。^⑥

こうしてレーニンは、第三回Z会議がその月の五—二日に開催される九月に入っても地下から持論を展開し、来たる一六〔三〕日の党中央委員会の総会で左派会議召集のための決議がなされるように説いた。^⑦

④ この対立に至る経過については cf. Gankin/Fisher, 533-8; A. E. Sann, *The Russian Revolution in Switzerland 1914-1917* (Madison, 1971), 206-18.

⑤ レーニン全集、第三三卷、三二七頁(以下③三二七と略記)。

⑥ ③六六—七。

⑦ ③六六—七。レーニンはこの「国際主義者」として、以下本稿で検討していくいわゆる左派を中心に名を列举している。同、六一—四。

⑧ 在外代表部 Заграничное представительство ЦК РСДРП ⑧ は四月三日、帰国途中のレーニンの提案の下にストックホルムに創設された。メンバーは既に当地で活動していた B・B・ヴォロフスキー、J・ハネツキと、レーニンらと「封印列車」でやってきたが一人埃國籍のヴィザのため入露を許されず留まることになった K・ラデクであった。История Времени Интернационала, II (M., 1966), 500; Teukin, 560. として、在外代表部の主目的はロシア革命の展開につづいての正確

な情報を各国内社会主義者へ供給すること、彼ら左派と接触を確保することであった。

⑥ Bopodona, Zapravivnoe..., 37 (六月三日、ストックホルムへ打電)、

⑦ 八三(六月一日、ラデクへ)。

⑧ 三四五(八月三〇日、中央委員会在外ビューロー〔代表部〕へ)。

⑨ 三四五—六。

⑩ 二二九(晩くとも九月一六日、Z問題について)。

二 ジノヴィエフの反論

このレーニンの主張が党内に引き起こした波紋は大きい。まず、ポリシェヴィキ党第七回全ロシア協議会(いわゆる四月協議会)でジノヴィエフの反論がなされた。

五月一二日〔四月二九日〕の第五日程「インタナショナル内の状況とロシア社会民主労働党(ボ)の任務」での報告でジノヴィエフは次のように述べた。「わが党は、Z—ブロックでZ左派の戦術を主張するという自らの任務を提起しながらそこにとどまり、そして直ちに第三インター創設への第一歩を踏み出すことを中央委員会に委任する。」ここで「わが党が〔Z〕ブロックにとどまり、しかも第三インター創設へと歩み出すことができるかという問題が出てくる。が、このブロックの性格からそれが我々を自由に活動させ、そして我々が自らのインター再興の歩を進めることができることは明らかだ。」しかも「我々とともに行くべきグループを、或いは、わが党への信頼が不十分であるという理由だけで目下まだ我々とともに歩んでいないグループを我々がZから連れ出すことに成功することはありうる。」「この〔開催予定のZ〕会議で我々の代表は、Z左派グループの結合とZからの完全な脱退という意味において大きな役割を演ずるだろう。」その会議で「Zの多数はこれ〔ストックホルム会議参加〕に与するだろう。その時こそ分裂のための瞬間であらねばならぬだろう。」⑪

この報告全体にわたってレーニンは反対した。彼によると、我々はZに情報を得るためにのみとどまるべきであり、「我々がこれ以上誰かを味方に引き入れるだろうと期待するのは望みが薄い。」⑫

再度ジノヴィエフは発言した。キーンタール会議（一六年四月の第二回Z会議）の時もZにとどまるかどうかの問題が生じた際、我々とはどまることに決めた。なぜなら、我々がなぜ脱退するのが大多数に理解できかねるからであった。「我々は第三インター建設のイニシアティブをとる。しかし、我々がZ左派諸党と合意するまでは、またあらゆる労働者がなぜ我々が決裂するのかを把握するまではZと断絶しない。」^③

結局、レーニンの情報目的だけのためにとどまるという修正案は否決され、ジノヴィエフの議案が反対一（レーニン）、棄権六で可決された。^④

既に第三インター創設の時であり、Zには情報目的のためだけにとどまりその左派だけの会議を即刻開くべきだとみるか、それとも、来たるべきZ会議での西欧社会主義者左派との合意によって初めてその創設への第一歩が踏み出されるとみるか、或いは、これ以上Zから味方を引き入れることははや期待しえぬとみるか、それとも、なおその可能性をみるか、ここに両者の対立点があった。

両者とも第三インターの中核としてスパルタクスらインタナショナルリストを前提にしていることは共通である。問題は彼らインタナショナルリストとともに第三インターが創設されるべき条件が既に整っていたか、別言すれば、ポリシエヴィキによるヨーロッパ社会主義運動の革命的分子の糾合の可能性が当時あったかどうかにかかっていた。

その条件、その可能性を検証していく前に、Z問題に関する党中央委員会の態度について触れておきたい。その態度がポリシエヴィキ多数の当時の見解だと考えられるからである。

③ *Celakan* (Amperhckan) *Bepeccuicukan* PCTPT (Gorhunenikon).

Amperh, 1917 *rota*, *Pporokom* (Al., 1958), 231-3.

④ *Ibid.*, 233-4.

⑤ *Ibid.*, 234, 372.

⑥ *Ibid.*, 233.

三 党中央委員会の態度

八月二九日、中央委員会（の内輪のメンバーによる）会議は、第三回Z会議へ特別に代表をストックホルムへ派遣することは「現下の情勢では」技術的に不可能である故、中央委員会の代表権を在外代表部のラデクとヴォロフスキーに与えることを決定した。しかも、もしZの多数がストックホルム会議へ行くことを決議した場合はZを去るようにとの指令の下に^①。明らかにこれはレーニンの意向に反する。九月一六日の総会の代わりに開かれた中央委員会会議では、前述の左派会議召集を説くレーニンの手紙はついに取り上げられなかった^②。

中央委員会は、四月協議会で採決された（ジノヴィエフの）決議と続いて五月二三日の中央委員会で採択された、もしZがストックホルム会議に応ずるなら我々はZから脱退するとの決議の立場を変えなかった。或いは、彼らはその立場を再確認していくものの増々ロシア国内問題へのめりこんでいくことになった、と言った方がよいかもしれぬ。

第六回党大会（八月八一―一六日）では第八日程に「インタナショナル」問題が掲げられるが、会期延長を状況が許さぬこともあって、その問題の議案作成は中央委員会に引き継がれることになり日程からはずされてしまった^③。そして、その党大会で新たに選出された中央委員会の以後の会議でも再三ストックホルム会議とZ会議問題は議事日程にのぼるが、これまでの決議を再確認するだけで一度として十分に討議された形跡は見当たらない^④。

が、中央委員会が来たるべきZ会議に第三インター創設への踏み台をみていたことは疑いえない。その考えを表したものととして、直接中央委員会の手にはならぬが、九月一日に公表されたベトログロード・ソヴェトのボリシェヴィキ・フラクシヨンの決議案「ストックホルム会議について」がある。「革命的第三インターの完成をめざして直ちに実践的な歩みを開始するために第三回Z会議に参加することは不可避だ」とそれは表明したのである^⑤。

① Protokoly Centralskogo Komiteta PCJPII (9). Aaryer 1917-

poopany 1918 (11, 1958), 22. 実際にはラデクはポーランド社会民主

党の代表権で出席し、ポリシエヴィキ党の代表権はヴォロフスキーと「ドイツ政府を介してブルガリアからストックホルムまで運ばれ、そこに入露許可を求めて留まっていた」H・A・セマシニコもった。

② *Ibid.*, 41-2; cf. Kopyev, 150.

③ Cf. Темкин, 582. ノーニンはその決議が四月協議会の誤りを半ば訂正させることになった(②七五)と述べている。が本文で記したように、その決議は四月協議会でのシノヴィエフの主張と対立するものではなくてな。

④ Шестой съезд РСДРП(б). Протоколы (М., 1958), 219-20, 241.

⑤ Протоколы Центрального..., 3-4, 22, 39; cf. 15-6, 63, 66.

四 各国社会主義者左派との接触の担い手たち

(一) 彼らの見解

ポリシエヴィキの各国社会主義者左派との接触はストックホルムの在外代表部(一時的だが党中央から派遣されてきたコロンタイも)によって試みられた。が、彼らのZ観はレーニンの即時離脱論に与するものではなかった。それ故、両者の葛藤は新インター創設をめざすポリシエヴィキの運動にとって重い意味をもつことになった。まず、彼ら接触の担い手たちのZ観をみることにする。

コロンタイの見解は、今日一部公表されている一七年三月一四日と一六日のクリスチアニア(オスロ)からチューリヒのレーニンへ宛てた彼女の手紙に端的に窺われる。彼女がまず強調するのは、「Z左派」の実像が各国社会主義者に今なお知られていないという事実である。当地のノルウェーとスウェーデンの左派ですら、彼らが「Z原則」を引用する場合Z左派以外への配慮はない。つまり、Zの中にカウツキー主義もあることを彼らは理解していない。それ故、我々の任務は

⑥ КИСС в борьбе за победу Великой Октябрьской социалистической революции. 5 июля-5 ноября 1917 г. Сборник документов. (М., 1957), 134. この決議案は、八月二十九日の中央委員会会議での第一日程「ストックホルム会議」の討議の際ストックホルム会議不参加というこれまでの決議が確認され、その議案作成がスターリン、ソコロニコフ、ウリツキーに委任され、そうして出来上がったものと考えられている。Протоколы Центрального..., 22, 254; В. В. Анисен, Делегатность ЦК РСДРП(б) в 1917 году (Хроника событий) (М., 1969), 248.

ISKのまわりに反対派を形成すると同時に、特定の反対派勢力をZ左派へと集結させ、「Z中央派」と右派の誤りと非一貫性を仮借なきまでに批判することであり、そのための情報と時間が必要である、と。その主張の背景には、まだ他に、インタナショナルの中心が形成されていないとすれば今Zへの反対運動は時宜をえたことではあるまい、との彼女の状況判断があった。^①

三ヶ月後、コロンタイはフィンランド社会民主党第九回大会に出席し、フィンランドの同志に彼らの党の第二インターからの脱退とZ左派への加盟を説いたが、その党大会は前者は果したものの、Z左派ではなくZ「ISK」への加盟を決定した。^② その時のことを彼女は次のように回想している。「彼らにとってレーニンとは当時まだ権威がなかった。『Z左派』——それは何か曖昧な、無限定な概念であり、或いは『有害』でさえあるかもしれぬ。^③ ここには、上述の彼女の状況判断に通ずる認識がある。

だからであろうか、この党大会での演説(六月一七日)でコロンタイは、第二インターの破滅と「新しいインター」創設を主張し、そしてストックホルム会議を批判した後Zに言及するが、そこにも意見の対立があることに注意しなければならぬと述べただけで、それに対する自らの明確な態度を表明してはいない。^④

在外代表部のZについての見解を表明している史料は今日ソ連で公表されていない。ただ、六月一日にラデクがレーニンに宛てた手紙の中で「Zと断乎決裂しなければならぬ^⑤」という一センテンスだけが知られているにすぎぬ。そして、その意見は直ちにレーニンに支持された。^⑥ しかし、ラデクばかりが在外代表部はそれとは逆の方向に歩み出すのである。

① Карпнер, 371; Ленин и международное рабочее движение (M., 1969), 313; Теккин, 557. Чоムキンは、新しいインターの中心は実際に既にポリシエヴィキの指揮するZ左派で構成されていたことをコロンタイは考慮におかなかった、という典型的な(レーニンの見解を踏襲するという意味で)反論をしている。ibid. Чоムキンのいう

② 新しいインターの中心が果して当時「中心と言っただけ」であったかどうかがその以下の検討の対象である。

③ A. M. Колдунгай, Из моей жизни работы (M., 1974), 264-7.

④ Ibid., 265.

⑤ A. M. Колдунгай, Избранные статьи и речи (M., 1972), 215-6.

⑤ Tokumiri, 530.

⑥ 八二三(六月一日、ラヂクへ)。

(二) 在外代表部の活動

イ、各国社会主義者左派との接触

当時ポリシエヴィキの接触ルートは二つあった。一つは、在外代表部のあるストックホルムを、もう一つは、レーニンらが帰国した後もなお残留していたB・A・カルピンスキーと『ドゥマン』(後述)を刊行していたフランス人H・ギルボのいるスイスを通じてであった。後者のロシア国内との連絡経路は、カルピンスキーのロシアからの情報入手を中心とした在外代表部との緊密な接触^①、また在外代表部との接触についてのギルボの回想や彼による十月革命の歓迎電報がいち早くストックホルム経由で送られたことなどからみて、ストックホルム経由であったことは間違いない。それだけに、ストックホルムルートの重要性が当時大いにあった。

六月二日〔五月三〇日〕、党中央委員会書記局は在外代表部の機関紙 Russische Korrespondenz “PRAWDA” (六月三日創刊。以下『コレスボンデンツ』と略記)のため四五〇〇ルーブリを支給している。これは党の五月(露曆)分総支出の約四分の一にあたる^④。しかも、この財政援助は七月事件まで一定して続けられたようである^⑤。また既述のように、中央委員会は第三回Z会議への代表権を在外代表部メンバーに与えた。これら二例だけみても在外代表部に対する党中央の期待は大きい。

もう一人の担い手、コロンタイについて言うと。二月革命まで、Z左派の一つスウェーデン左派との接触は北欧諸語に堪能なコロンタイによって主に進められてきた。(その接触及び彼らへのポリシエヴィイズムのプロバガンダに果したコロンタイの大いなる貢献は、彼女とレーニン、クループスカヤとの文通に歴然と示されている。)そのコロンタイを中央委員会はストックホルムへ派遣することを決定し、五月一七日にその派遣費として五〇〇ルーブリを支給している^⑥。実際の派遣は遅れて(その間、既述したようにフィンランド党大会にポリシエヴィキ党の正式代表として出席するためヘルシンキに赴いた)彼女は七月九日

に派遣され、同月一九日か二〇日までストックホルムに滞在し、在外代表部と行動をとにした。^⑧

在外代表部のその接触について、近年のヴォロポツォヴァの実証的研究が初めて我々にその包括的な知識を与えてくれた。以下その接触の具体例を逐一挙げてみたい。そうすることが当時の「新しいインターの中心」の実態を照らし出すと考えるからである。

まずドイツでは、二月革命までラデクがスイスから積極的に参与していた「左翼急進派」の一つブレレーメン左派がいた。その指導者J・クニーフは一七年五月に徴兵回避のためブレレーメンを去って地下潜行を余儀なくされ、そして各地の左派と接触をはかった。その中に或る人物を通じての在外代表部との接触もあった。^⑨クニーフは在外代表部にドイツ革命運動についての情報を提供し、その情報は『ブラウダ』に伝えられ、レーニンを大いに満足させたという。^⑩

スバルタクスとの接触も実現している。四月二三日、ハネツキはレーニンへの手紙で「我々のヨーロッパとの接触は既に組織されている。スバルタクスから誰かが我々のもとに来ることはありうる。ともかく第一歩は踏み出された」と書いた。^⑪そして、その接触は六月初めに成った。^⑫が、スバルタクスの誰がその接触にあつたのかチヨムキンは言及していない。それは他の史料から次の二つのうちどちらかをさすと考えられる。一つは、エドゥアルト・フックス。彼もストックホルムへ赴き、在外代表部と会談しているが、何が語りあわれたのか不明である。

もう一つは、オランダのスバルタキスト。その指導者カール・ミンスターはデュイスブルクで戦闘的機関紙『カンプ』を主宰していたが、官憲の弾圧を逃れて三月三一日にアムステルダムへ移り、^⑬そしてその地で再び『カンプ』を刊行していた。一七年夏には、彼はデュッセルドルフ、デュイスブルク、そしてベルリンの各スバルタキストと連絡をとる他、ブレレーメン左派のクニーフ（彼は地下潜行中直接オランダに赴いている）や、チューリヒのスバルタクスグループや社会主義青年インター・ビューローと、そしてスイス在住のボリシェヴィキとも接触をもっていた。そればかりかストックホルムの在外代表部との直接の接触もあったという。^⑭最後の接触についての実態は明らかでないが、『カンプ』に在外代表部の

『ロレスボンデンツ』からの転載や、^⑭更には十月革命の報道が伝わる直前の号で在外代表部のもう一つの機関紙 *Bote der Russischen Revolution* (以下『ボータ』と略記)の一号(九月一五日)から八号(二月三日)までの予約購読を宣伝し、その発送の取り扱いを『キャンプ』が引き受けていることを記しているところから、両者の関係の深さが想像される。

次に、オーストリアの場合。「前年秋、F・アドラーによる暗殺事件がもとで解散させられてしまった」「カール・マルクス」クラブに集まった少数の左派グループが規則的にストックホルムへ自国の革命運動の発展についての情報を秘密に送っている。六月二日「五月二〇日」の『ブラウダ』には、その国の五月二三日の「大戦勃発以来最初の大規模な」ストライキが報じられた。^⑮

同様に、ハンガリーにおける革命的状況についての情報が、ストックホルム会議のため当地へやって来た「五月末」Zs・クンフィを介して伝えられた。ラデクは自伝の中で、その時のクンフィに、中欧における革命の到来を固く信じていた社会民主主義者の一人であったと高い評価を付している、^⑯が先回りして言えば、当時のハンガリーの少数の左派の認識が問題だった。即ち、彼らは自らをZ左派の隊伍に加えたが、「Z左派の観点」を知らなかったばかりか「中央派と実際に革命的な左派とを区別しえなかった」という。^⑰

フランスについては、五月一日に金属連盟(Z派のA・メランが指導)の名でメーデー宣言が発せられ、それは初めて公に「ヨーロッパ革命のみがプロレタリアートの利益にかなう平和を与える」と表明したのだが、^⑱在外代表部はその宣言を、Z左派のF・ロリオが三月以来メランに代わって書記を務めていた国際関係回復委員会(C.R.R.I.)の宣言としてロシアに送っている。^⑲

スウェーデン左派については後に回すが、ポリシェヴィキが彼らと二月革命前から相当な接触をもっていたことは、コロンタイで前記した。一六年初め、ヴォロフスキーもやって来た。^⑳また、ポーランド人ハネツキも一五年七月にスイスカラコペンハーゲンに移り、スカンジナビアでの地下活動を開始していた。^㉑

そして、ブルガリア・テスニャーキの検討も後に譲るが、テスニャーキから五月に、当時召集されていた第三回 Z 会議に参加するためストックホルムへ Γ・キルコフと B・コロロフが派遣されてきた。そして、彼らは組織的にロシア革命の情報を自国に送った。^② 彼らのストックホルムからの記事が党機関紙『ラボートニチエスキーヴェーストニク』（以下『ヴェーストニク』と略記）に掲載された数は三〇を越える。^③

その他、（第一回 Z 会議の一先駆となった一五年四月の国際社会主義青年会議で設置された）社会主義青年インター・ビューローの書記 W・ミュンツェンベルクがいる。彼は五月半ばにストックホルムへやって来て、在外代表部、ISK（グリム、バラバノフ）とともにスウェーデン左派の党創立大会（五月三十一―六日）に出席した。^④ 続いて同月一九―二〇日に当地で社会主義青年インターのビューロー会議が開かれたのだが、それに「二・三のストックホルム滞在のロシアとフィンランドの同志がゲストとして」出席したという。^⑤ ロシアの同志とは在外代表部メンバーをさすのであろう。そして一度帰国後、再びミュンツェンベルクはやって来て、当地で八月一九―二〇日にビューロー会議を開いたが、それにも二・三の在ストックホルムのロシア同志がゲスト出席した。^⑥ こうして、ミュンツェンベルクは（その内容は不明だが）五月と八月に在外代表部と接触をもった。^⑦

また、六月一八日にアメリカ社会主義労働党の B・レインステイン、M・ゴルドファープとユダヤ人小社会主義政党の D・ダヴィドヴィチがストックホルムにやって来た。^⑧ レインステインの後年の回想によると、元々彼らはストックホルム会議のために派遣され、（その会議開催準備のために創設されていた）オランダ・スカンジナビア委員会と会談した（六月二〇―二二日）。それと同時に、在外代表部のハネツキ、テスニャーキから派遣されてきていたキルコフとも会談した。その結果、もはや第二インター再建は不可能であり、第三インター創立の不可避性を自分は認識した、と。そして、彼は次に Z に期待をかけた。が、USPD と在外代表部が出席した会議（七月三日の Z 会議と考えられる）後、彼はもはや「Z」からは（或いは Z に残存するいかなるものからも）新インターの創設は期待されえぬ」という意識をもって六月末「恐

らく露曆」にベトログラードに発つた。^⑧

実はこの回想がコミンテルン創立一〇周年記念として書かれたことに私は執着せざるをえない。果して一七年のその段階で既にレインステインに第三インターへの道がZとの訣別の下に意識されていたのであろうか。私はこの彼の記述を後からの詠み込みではないかと疑う。なぜなら当時かかる見解をもっていたのは、史料的に確認されうる限りレーニン以外にいなかった。

以上、在外代表部の各国左派との直接の接触を今日知られている限り挙げてみた。が、その接触の内実こそ問題だ。上述のレインステインの回想への私の反論は十分ではない。そのためにも、当時レーニンによってZから即時離脱して直ちに創設されるべき第三インターの「中核」とみなされていた当のZ左派が、果していかなる新インター像を抱いていたのか、しかもそれらの接触を通じて果して彼らはその新インター創設への具体的展望を築いていったのかを検討する意義は大きいと考える。が、それを検討しようにも実はその新インター創設と対Z問題がそれらの接触で語られたという形跡は史料的に確認できない。次節で立ち入って検討するが、在外代表部自体がレーニンに対立する見解をとったことから、レーニンのその主張が在外代表部を通じてZ左派に浸透していったとは考えられぬ。が、決定的な問題は在外代表部のその「不活動」以外のところこそあった。つまり、当時Z左派においてすらレーニンの新インター論をはじめとした思想が十分に理解され受容されていなかったという事実である。レーニンの即時離脱論もまた彼らに受け入れられる余地はなかった。以下、その事実の実証を試みたい。

大戦中ポリシエヴィキの強い関心の対象となっていたスウェーデン左派は、五月半ばに新党を創立し、その創立大会にロシア社会民主党を代表して在外代表部を招待した（既述）。また、在外代表部の『ポータ』はその名目の編集者をスウェーデン左派のO・グリムルドとしていた。^⑨しかし、彼ら左派は新党結成後もポリシエヴィズムとの間に一線をなお画していた。彼らの反戦運動が根本において非ポリシエヴィキ的な武装解除という生来「平和主義的」なものであったことは

Z運動期を通じて変わるものではなかった。³⁵

帰国途次のレーニンと彼ら左派との二つの会談の内容が部分的に知られているが、それによると、まず左派の分離—新組織結成についてのやりとりがある。ストレムの今革命勢力を分散することは敗北をもたらさないかとの質問に、レーニンは断乎反論した。³⁶ また、グリムルドにもレーニンは、今日の主要課題はプロレタリアートを組織することであり、しかも新しい革命的組織が必要なのだと言った。³⁷ その会談の内実は、「最も極左である諸君ですら平和主義者なのだ」というレーニンの発言が端的に示唆してくれるほどのものであった。³⁸ インター問題についての討議は注記した諸回想には見当たらないがスウェーデン史家の言及によれば、レーニンはその地で我々は新しいプロレタリアートのインターの創設問題を来たるべき党大会の議事日程に挿入するだろうと表明した。がこの記述は、以後スウェーデン左派内で新しい第三インターが現実的展望をもって語られはじめた、新党指導者のヘグルンドら幾人か〔決して「幾人か」ではない〕はZ運動をその新インターの基礎とすることを試みていった、と続く。³⁹

六月のグリム事件後、ISKはスウェーデン左派によって担われることになった。⁴⁰ が、もはやZの可能性を否定していたレーニンはこのISKの「左傾化」を第三インター創設へのZ左派の結集を鈍らせるものとして苦々しくみていた。それに反して、彼らの新ISKは第三回Z会議召集の準備へと向かっていった。その上、七月末に彼らは、追放されたばかりのグリムにZに関する小冊子の執筆を依頼し、そのスウェーデン語版を最初に公刊してもいる。⁴¹ 自ずとスウェーデン左派のZにおける「柔軟な」位置が浮かびあがってくる。

次にフランス—Z左派について。彼らの活動についてはクリージェル女史の実証的研究によってほぼその一六年段階の実態を把握することが可能になった。その前にこのフランス左派の評価については歴史的な対立があることを触れておきたい。

一九二一年、コミンテルン第三回大会に先だつ拡大執行委員会へ、かつてのフランス—Z左派のリーダー、ロリオ自身

が「我々反対派運動は当初Z左派、つまりレーニンの見解を知らなかった」と報告した。^④これに全く対立する見解が三四年、J・ロシエと署名された小冊子^⑤によってポリシェヴィキの立場からなされた。それによると、一六年一月から四月まで訪仏したイネッサ・アルマンドとパリ在住のポリシェヴィキの当地での活動は高く評価されるものであり、一六年以降のフランスへのポリシェヴィズムの普及は彼らの尽力に大いに負っていた。^⑥続いてその二年後に発刊された、かつての革命的サンディカリズムの雄A・ロスマルの大著はわざわざロシエへの反駁の一章をもうけた。^⑦それによると、ロシエはロリオがZ左派の見解を初めて明らかにした小冊子『Zの社会主義者と戦争』を書いたと記しているが、このC R R Iから出された小冊子は無署名であったし、その準備段階でトロツキーが関与した。^⑧その上、遅れて我々の陣営にやって来て、当時「Z内では中央派の」メランと接触を計っていたロリオはC R R I内でZ左派の信奉者だと名のつたことは決してなかった、と。^⑨

このパラドキシカルな両見解をクリージェルは実証的に検証してくれた。ここではその結論だけ記すことにすると、Z左派は一六年初め以来、ロシエが記述しているように、パリ在住のポリシェヴィキや他ならぬロリオによってフランス労働運動内に僅かだが知られていたことはフランスZ派らの多くの史料から明らかだ。が、「彼らポリシェヴィキからレーニンへしきりと、自派の出版物の刊行等によるフランス左派内への影響が報告されていたにもかかわらず」なぜかZ左派の見解を載せたパンフレット類は今日なお見い出せないのである。^⑩重要なのは、レーニンの一六年一月二五日付のイネッサ・アルマンドへの手紙^⑪（二六〇）からわかるように、レーニンがフランス労働運動へ直接的にも間接的にも影響力を及ぼすことができなかつたという事実である。要するに、レーニンの存在は知られていたが、彼の思想は筋を追って理解されはしなかつた。^⑫

かかる状態は一七年段階も変らなかつた。一ツ連史家は、一七年三月以来C R R I書記となりその再組織化をめざしていったロリオの活動を高く評価し、そしてC R R Iの左派グループには既に一七年春に第三インター創設の賛同者がいた

として、メーデーの日に国外(ジュネーブ)で公表されたロリオによるC R R Iの綱領的論文「第三インターに向って」⁽⁵⁾を例に挙げている。⁽⁶⁾けれど、ロリオの言う「第三インター」とはレーニンの唱えるそれとあまりにもかけ離れていたことはその本文に歴然と示されている。それは、今こそ社会排外主義者とインタナシヨナリスト(Z派)との決定的対立の時であると記すが、目をフランス少数派へ向けてなになんでも統一という死したドグマにしがみつくと諸君はこの事実を理解しているのか、という表現で終わっている程度のものであった。⁽⁷⁾

C R R Iは三月二九日に「行動綱領」を採択したが、それにはC R R IがI S Kに加盟していることと、それとの不断の接触が明記されていた。⁽⁸⁾そしてC R R Iは、フランス政府のパスポート交付拒否にあい実現しなかったが、第三回Z会議への代表派遣を決定した際他ならぬロリオを二名のうちの一名に指名した。⁽⁹⁾

C R R IのI S Kとの関係は以後も続く。一八年半ばまでI S K機関紙はC R R Iからの自国Z運動についての報告を載せ、十月革命後はC R R Iによる、ボリシェヴィキの即時平和闘争への歓迎の電報と反干渉戦争の決議声明をいち早く掲載した。⁽¹⁰⁾

もう一人、ギルボーについて検討しておきたい。まず留意されるべきこととして『ドゥマン』の立場がある。即ち、一六年一月に彼の手で創刊された『ドゥマン』はロマン・ロランの参加をみたインテリゲンチヤの反戦運動から出発したものであり、そして徐々にZの立場を明らかにしていき広くZ全体に門戸を開いていった。しかも後者の立場は、前者のそれをも残しながら在外代表部と接触している間も保持された。⁽¹¹⁾

ギルボーは創刊当初「新しい革命的インター」をZ派と非Zの少数派(ロンゲ主義者)の団結の上に見ていたが、⁽¹²⁾間もなく両者の溝を多数派と少数派とのそれより深いと述べるようになる。⁽¹³⁾それ以後の彼の立場はC R R I内の左派と通ずる。第三回Z会議が召集された時彼もまた、ジュネーブのフランス大使館のヴィザ交付拒否にあうが、ストックホルムへ赴こうとした。⁽¹⁴⁾

レーニンが「実際の国際主義者」として高く評価したものに英、米の社会主義者もいた。ここでは立ち入った検討はしないが、一言でいえば、レーニンに評価される側、側の当事者たちは逆にレーニンの思想を理解していたとはいえない。^⑧最後に、ポリシェヴィキ党に最も近い位置にいたと考えられるテスニャーキ、ブレーメン左派、ポーランド社会民主党が残った。^⑨

ブレーメン左派は機関紙『アルバイター・ポリテイク』で、ストックホルム会議計画について当初から一貫してその計画の担い手である社会愛国主義者を批判していった。その上、彼らは「インターナツィオナレ」派に（その指導者ハゼラがその会議への出席をめざしている）USPDから脱党し我々とともに新党を結成することを強く促すという脈絡の中で、その派（ローザ）のストックホルム会議に対する早期の消極的「期待」表明にかみつき論争を挑んだりした（この点後日の検討に委ねたい）。^⑩それに比べて、彼らのZ運動についての言及は、フランスを欠くほど少ない。しかも、それに対する彼らの表だつた態度表明はない。^⑪が、言及されている場合、それは在外代表部の転載であつた。^⑫ブレーメン左派にはレーニンの離脱論に呼応する動きは全く見い出されない。

ポーランド社会民主党について。在外代表部のハネツキとラデクはポーランド社会民主党の指導的メンバーでもあつた。一九一一年一月以来中央委員会と反対派（後者は一四年初めに国内委員会を組織）に分裂していたその党は、大戦中の社会主義インターナショナルに則る共同の反戦運動と一六年の各地の市評議会選挙での共同カンパニアを経て、一六年一〇月三〇日から一月四日にかけてのワルシャワでの統一大会で再統合を実現した。^⑬そして、そこで中央派分子との闘争と革命的インターの急進的グループ、いわゆるZ左派への支持が決議された。^⑭がインター「ISK」への代表派遣問題については、新たに選出される中央委員会に委任されることになつた。そして、そこで決まらない場合はその問題は来たるべき全国大会に受け継がれるとした。これには反対が出た。反対者はこの代表選出の緊急性を強調した。結局、代表選出は実現しなかつた。^⑮それ故、ラデクとハネツキの第三回Z会議でのポーランド代表権は正式のものではなかつた。後述する七

月二〇日のZ左派声明への彼らの署名もポーランド社会民主党中央委員会ではなく、彼らが与していた再統合前の国内委員会であった。

なぜその事実を強調するかというと、もう一方の中央委員会(ヴァルスキ)は第一回と二回のZ会議で「インターナツィオナール」派に与し、「Z左派」と一線を画していたからである。上述の統一大会でのZ左派への支持決議には明らかに国内委員会の影響が窺われる。がこれには、党の再統合を計るべく一六年六月にスイスから帰国したヴァルスキが帰国早々逮捕されたことによる中央委員会指導者の欠席という事情^②を配慮しなければならぬ。当時Z左派の一翼として名を連ねたポーランド社会民主党とは畢竟在外代表部の二メンバーのことであった。

最後にテスニャーキを検討する。今日ソ連史家によって、当時テスニャーキはボルシェヴィキに最も近い位置にいたと高い評価が下されている。^③しかし、彼らの評価がテスニャーキの一面しか促えていないことが、(彼らもこれを利用しているのだが)当時テスニャーキの『ヴェーストニク』の編集者であったカバクチェフの遺稿^④によって明らかとなった。前述したようにキルコフとコロロフが第三回Z会議に参加するためストックホルムへ派遣されてきたが、ヴォロブツォヴァは彼らのその直接の派遣目的を記していない。その代わり、ロシアの革命的諸事件について正確な情報を得ることとボルシェヴィキの活動について知識を得ること、そしてボルシェヴィキと直接の接触を確立するため、としている。^⑤が、彼らが一義的にかかわったのはZ運動であった。以下、その実証を試みる。

カバクチェフは所々で、テスニャーキが二月革命から十月革命勃発まで常にボルシェヴィキの見解に与したわけではなく、また革命の道をレーニン主義の視点からみることができなかった、と率直に語っている。^⑥それではテスニャーキのZ観はというと、彼らは大戦勃発時からインターの統一性の維持の立場にあった。それ故、彼らは第一回Z会議でもZ左派に与することなく、Z内の中央派への断乎たる反対もとらなかった。^⑦Ⅱ・ブラゴエフひとり第二インターの裏切りに反対し、新しいインターの創設を主張した時^⑧も、党はインターの統一に固執した。二月革命後、党は中央派への態度を変更し

て、Z内^⑩で概して左派グループを支持した。が、その時もまだ完全にレーニンの立場に立っていないかった。そして著者はそのレーニンの立場の後に括弧して、党はそれ以後その立場へ移っていったと書いているが、それがいつなのか明言していない。それが十月革命前でないことはまず間違いない。それは彼らがISKと新インター創設との連関をいかに捉えていたかで傍証されると考える。

五月三十一日『ヴェーストニク』が報道したところによると、党中央委員会は、ISKが第三回Z会議召集を決定したということが我々に知られる前に、新たなZ会議召集の問題をISKに提起した。また、同月二三日の『ヴェーストニク』に掲載された論文「いかなる統一をか」では、「この「第三回Z」会議の任務はZ内のすべての潮流を「統一することにあるのではなく、独自の階級闘争と国際プロレタリアートの連帯の見地に立つ潮流だけを統一することにある」^⑪「かくしてこそ新インター創設の道である」と。ここには左の立場からだが来たるべきその会議への期待がある。それは当然のこととしてレーニンの見解との相違を生み出す。だからこそ、ここにこの遺稿を公刊したソ連史家の編注が入っている。即ち、以後の事態の進展が明らかにしたように、また当時既にレーニンが指摘していたように、テスニャーキが支持したこのISKを中心とした新インター創設の道は破産したのだ、と。^⑫

Zに対する彼らの確定的な立場表明は六月一二日のISK機関紙に表れた。^⑬党はこれまでBSIへ大戦中開かれずにいる国際会議召集を要求してきたが、BSIメンバーがストックホルム会議開催を企てている現在、我々の要求は無意味となった。それ故、党は来たるべきZ会議を歓迎し、「新しいインターの萌芽をブルガリアの党はその中にみるベルンのISKに最終的に加盟した」と彼らは表明した。^⑭

ISKに寄せる彼らの期待はグリム事件後も続く。七月一八日の論文「グリムの役割」は、今こそ「ISKは万国の国際的組織の、また社会主義インタナショナルナリストの活動の有効かつ統一的中心にならねばならぬ」と表明した。^⑮「まさしくZにはZ左派だけが留まっている」という表現からみても、彼らはまさにその左派だけのISKへの結果をめざし、

その先に新インターの創設をみていた。

テスニャーキ代表はその直前に帰国してしまって、そこでの彼らの態度表明は実現しなかったが、その第三回 Z 会議後もテスニャーキは、その会議後 Z は死んだというデマを批判し、それは生き続けていると表明した。なるほど第三回会議は第三インター創設を果さなかった、がその第三インターは社会愛国主義者や中央派のやり方ではなく、今まさに革命ロシアのバリエードの中に生まれている。^⑧ ここには、彼らのインタナショナルイズムと重ならせて Z 並びに第三インター像を普遍化する傾向はあるが、彼らの Z との積極的なかかわりの持続性が読みとれる。

以上、在外代表による接触のもう一方の側の Z 左派におけるレーニン理解と彼らの Z 並びに新インター観を考察してきた。その結果を更に別の視角から確認するため、在外代表部のもう一つの主要任務だった左派会議召集の顛末をみることにする。

- ① В. Попповский, Дай руку, товарищи! Документальная повесть о В. А. Карпинском (М., 1972), 187, 189-90, 192-3, 195, 197-203, 207.
- ② H. Guilleaux, Du Kremlin au Cherche-Midi (Paris, 1933), 134, 144-5, 164, 228.
- ③ O. Krusnezova, "Die Briefe von Ausländern an W. I. Lenin (Oktober 1917 bis 1923) als Geschichtsquelle", Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung [工人史略記], 1974, No. 1, 86.
- ④ Анисеев, 138, 142-3.
- ⑤ 三四三 (八月三〇日「在外代表部」) 参照。
- ⑥ Анисеев, 102.
- ⑦ Владимир Ильич Ленин. Биографическая хроника. т. 4. Март-октябрь 1917 (М., 1973), 262.
- ⑧ Колонтай, Из моей жизни..., 273-6.
- ⑨ G. Engel, "Volkschullehrer, Journalist, revolutionärer Arbeiterfunktionär. Johann Krieff", BzG, 1970, No. 6, 986-7; B. A. Артемов, "Иоганн Кинф (1880-1919 гг.). (Из истории жизни и борьбы)", Ежегодник германской истории, 1972 (М., 1973), 89-91.
- ⑩ K. Radek, "Autobiographie" [1929], G. Haupt, J.-J. Marie, Les bolchéviques par eux-mêmes (Paris, 1969), 336.
- ⑪ Тамкин, 560.
- ⑫ Ibid., 580; cf. Ленин и международное..., 320.
- ⑬ Radek, 336. ノットマンは八月末にノットマンホムトに来たことが確認できる。A. Blänsdorf, "Friedrich Ebert und die Internationale", Archiv für Sozialgeschichte, IX, 1969, 397.
- ⑭ K. Koszyk, "Das abenteuerliche Leben des sozialrevolutionären Agitators Carl Minster (1873-1942)", Ibid., V, 1965, 202.
- ⑮ И. М. Крушовъ, "Спартакочка в Голландии в 1917 году",

- Григунд, "На перевале", Воспоминания о Владимире Ильине Ленине, У(М., 1970), 98-101; Григунд, "По пути на родину", О Ленине. Воспоминания зарубежных современников (М., 1962), 163-4; Ф. Стрём, "Ленин в Стокгольме", Воспоминания о Виад-наппере..., V, 104-9.
- ⑭ Ibid., 105-7, 109.
- ⑮ Дашков, 1.
- ⑯ Стрём, 106.
- ⑰ К. Векстрём [Backström], "К вопросу о возникновении Коммунистической партии Швеции", Вопросы истории КПСС, 1959, No. 6, 100. 傍註引用者。
- ⑱ グリム事件とは中央派的立場にあったエのKのグリムがドイツ政府の手先として諷刺で訪問地のロミンから追放された事件で、キヒはそれだけでなくも親独的中傷のあった運動への不信を高めることになった。ストリマホネトに戻ったグリムは彼のエのK全権をキヒに譲った。この同意は疑わしい。リッヒはロミンから呼ば戻された、リッヒは「リッヒ」に彼がスマネークを左派はエのKを左傾化させることになった。cf. Lademascher, I, 583-5.
- ⑲ ⑳ ⑲ ハーキー (大月三〇日、キヒ) 参照。
- ㉑ R. Grimm, [Zimmerwald och Kienthal (Stockholm, 1917)] Zimmerwald und Kienthal (Bern, 1917), 2.
- ㉒ A. Kriegel, "Sur les rapports de Léline avec le mouvement zimmerwaldien français", Chateaux du monde russe et soviétique, 1962, No. 2, 299-306.
- ㉓ Ibid., 299; A. Rosmer, Le mouvement ouvrier pendant la guerre. [I.] De l'Union Sacrée à Zimmerwald (Paris, 1936), 464.
- ㉔ J. Roehner, Léline et le mouvement zimmerwaldien en France (Paris, 1934). 本書を未完だが、リヒはリッヒと左派リッヒの論文 (C. Бинтке, "Ленин и Циммервальдские движения во Франции", Пролетарская революция, 1934, No. 3, 113-48) の公認をリッヒに譲るべき。以下にリッヒ。
- ㉕ Ibid., 132.
- ㉖ "XIX. Comment il ne faut pas écrire l'histoire. «Léline et le Mouvement zimmerwaldien en France» par J. Roehner", Rosmer, I, 454-69.
- ㉗ 本書をリッヒの小冊子の草案はリッヒ十六年八月一日のCRR I会議でリッヒが提出したリッヒ少数派批判の決議案がリッヒの意識的決定のため採決された後に、リッヒの少数派批判を和らげリッヒが提議された。cf. Kriegel, "Le dossier de Trotski à la Préfecture de Police de Paris", Cahiers du Monde russe et soviétique, 1963, No. 3, 292-4; cf. A. Rosmer, Le mouvement ouvrier pendant première guerre mondiale. [II.] De Zimmerwald à la Révolution russe (Paris, 1959), 145.
- ㉘ Rosmer, I, 464.
- ㉙ Бинтке, 128, 145; A. Д. Трёмичка, "В. И. Ленин, парижская группа большевиков и социалистическое движение во Франции в годы первой войны (1916-1917 гг.)", французский Ежегодник, 1970 (М., 1972), 76-7.
- ㉚ Kriegel, Sur les rapports..., 300-5.
- ㉛ Ibid., 306; cf. R. Wohl, French Communism in the Making, 1914-1924 (Stanford, 1966), 469.
- ㉜ "Vers la Troisième Internationale", La Nouvelle Internationale, No. 1, V, 1917. リヒは未完だが、リヒは五月五日 [四月三十一日] の『レヒ』の公認をリッヒに譲るべき。

俄國に對する態度の變更に關する報告書、"К III Интернационалу" 及び "物産の進歩" (Yadász S., Lenin és a Zimmerwaldi Baloldal (Budapest, 1971), 196) の中で述べられている。

② Trembicka, 92; A. A. Trembicka, "Подъем массового революционного движения во Франции в 1917 г. и начало борьбы французских левых цинкваральностей за III Интернационал", Проблемы освободительного движения и международных отношений в новое и новейшее время (М., 1973), 42; cf. Вангке, 147.

③ Правда, No. 38, 5. V. 1917 [Д., 1927], 4 等号一田書。

④ Trembicka, Подъем..., 41.

⑤ Trembicka, В. И. Ленин..., 92-3; Trembicka, Подъем..., 43.

⑥ I. S. K. Nachrichtendienst, No. 28, 10. XI. 1917, 7; No. 31, 12. XII. 1917, 5-6; No. 32, 19. XII. 1917, 5; No. 42, 15. VI. 1918, 14-5.

⑦ 直に私が見るべきであった教皇の『エドムント』の中心は特に二三号(一月廿五日)の標題を参照。cf. Guibaux, 59-63, 88, 144-8.

⑧ Cf. Вангке, 144; Trembicka, Подъем..., 32; Trembicka, В. И. Ленин..., 82.

⑨ demain. Pages et Documents, No. 10, X. 1916, 201; cf. H. Guibaux, "Die französische Opposition", Arbeiterpolitik. Wochenschrift für wissenschaftlichen Sozialismus, No. 25, 9. XII. 1916 [Leipzig, 1975], 198.

⑩ Guibaux, Du Kremlin..., 150.

⑪ イギリスの工団がカプリネ, 371. フォットランドの工団が現時に左派に与するグループがいたことを示す点では共通する当事者としてのこの回想 (C. Рутгерс, "Встречи с Лениным", Историк-марксист,

1935, No. 2-3, 86; A. K-ay [Коллонтай], "Die Opposition in der 'American Socialist Party'", Arbeiterpolitik, No. 14, 7. IV. 1917, 109-10) を含む。私はこのインターナショナル理解を疑う。cf. T. Draper, The Roots of American Communism (New York, 1957), Chapter 4-6; Д. Я. Бурт, "В. И. Ленин и латышские революционные социал-демократы в Северной Америке (1905-1919)", Ленин и латышская революционная социал-демократия (Рига, 1970), 54-6, 60-1. (латышская)

⑫ ヲリビザノールンを第三インターの党としてホリントンキヤムを筆頭とすることなるスネルタムにたいしては敢えて触れなかった。スネルタムの新インター再建論から、これは本稿で考察して来たことから即時離脱すべきか、そして直に第三インターを創設すべきかという問題のたて方は決つて出ている。彼らの新インター再建の視座は、あくまで大衆運動の、むしろはプロレタリアート革命の成就に向けての、それは現実化しようとするものである。cf. Sparta-kustriele (Berlin, 1958), 137; Gankin/Fisher, 435.

⑬ Arbeiterpolitik, No. 20-23, 19. V-9. 1917; No. 27-28, 7-14. VII. 1917; No. 30, 28. VII. 1917; No. 35-36, 1-8. IX. 1917. 最後の号は『ホーネ』からの転載が誌面の半分近くを占め、スネルタムホルト会議についての記事も転載が続く。

⑭ "Stockholm-Illusionen" (二三号、六月九日) の中で、来たるべき会議をスネルタム会議と峻別されるべきとして好意的に記述している。

⑮ 在外代表部のこれに関する重要な表明として後に取り上げられている K. Radek, "Zimmerwald am Scheidewege"; "Die russischen Sozialpraktiken und Zimmerwald" がそれぞれ二三号(八月一八日) 四一号(一〇月一三日) に転載された。

- ⑳ B. Szmidi, *Socjaldemokracja Krolestwa Polskiego i Litwy. Materiały i dokumenty 1914-1918* (Moskwa, 1936), 167-72; L. Ferz, "Sprawa zjednoczenia „rozłamowców” z „zarządowcami” w 1916 r. (Fragment wspomnień działacza SDKPiL)", *Z pola walki*, 1961, No. 2, 87-9.
- ㉑ Szmidi, 170. 傍註引用者。
- ㉒ *Ibid.*, 171.
- ㉓ T. Feder, "Z działalności Adolfa Warszawskiego w szeregach SDKPiL", *Z pola walki*, 1959, No. 1, 206; B. Radlak, *SDKPiL w latach 1914-1917. Formy i metody działalności* (Warszawa, 1967), 58.
- ㉔ E. g. Worobcowa, *Детельность...*, 117-9; Карпинер, 385.
- ㉕ X. Кабакчнев, "Партия тесных социалистов революция в России и Циммервальдское движение", *Октябрьская революция и зарождающиеся славянские народы* (М., 1957), 9-34.
- ㉖ Воробцова, *Детельность...*, 117.
- ㉗ Кабакчнев, 11, 19, 20.
- ㉘ *Ibid.*, 12, 24.
- ㉙ 付註「つぎは」のツインメルヴァルトの新インター論はレーニンの主張
- ㉚ 「革命的社会民主主義者」会議の召集
- 七月前半、在外代表部は積極的に乙派の諸会議に参加した。彼らにとって成果なき会議だった^①。かかる時期七月一四日に彼らは『コレスポンデント』九号で、ストックホルム会議に反対するあらゆる組織に晚くとも八月五日までにストックホルムへ代表を派遣するよう呼びかけた。革命的社会民主主義者の糾合を計るためだった。続いて同月二〇日、在外代表部は乙左派の名で声明「社会主義インタナショナルへ」を發した^②。両方とも直ちに広く知られるところとなった。七月二
- つの呼称関係はなり。彼は新インター創設のため左派だけの統一を主張したか？ 今會議の中心行動の中心をなすをさうした。Ch. Kabackschew, "Der Weg zur Kommunistische Internationale. (Einsige Dokumente aus dem Kampfe der bulgarischen Kommunistischen Partei gegen den Opportunismus in der II. Internationale.)", *Die Kommunistische Internationale*, 1929, No. 9-11, 620-2, 624.
- ② Кабакчнев, 24-5. 傍註引用者。
- ③ *Ibid.*, 26-7.
- ④ *Ibid.*, 27; cf. Самуилов, 150-1.
- ⑤ G. Kyrkoff, W. Kolarow, "Die bulgarische Sozialdemokratie/Partei der Engherzigen/und die Internationale", *ISK. Nachrichten*, No. 8, 12. VI. 1917, 3-5.
- ⑥ *Ibid.*, 4. 傍註引用者。
- ⑦ Кабакчнев, 30; cf. Самуилов, 159-60.
- ⑧ [Раб. вестник, 23. VII. 1917] Д. Сименова, "Георги Кирков в родините на Първата световна война", *Известия на Института по история на БКП*, XXIV (София, 1970), 257.
- ⑨ [Раб. вестник, 14, 19. IX. 1917] Самуилов, 171-2.

八日のSPDの中央機関紙『フォアヴェルト』も両声明を報道した（このことは後で一つの問題として取り上げるが、ドイツ左派にも当然知れたったことをさす）^④。

七月二〇日の声明については、バラバノフによる全文採録^⑤によって仔細に検討することができる。そこには、戦争に対するZ左派の明確な態度表明がある。そして、社会愛国主義者によるストックホルム「平和会議」の真の目的の暴露があり、またその会議を利用しようとする「Z多数派でもある」「動揺分子」（平和主義的分子）が逆に社会愛国主義者に利用されるであろうとの指摘がある。最後に革命的社会民主主義者のとるべき態度として三つの要求を掲げている。一、ストックホルムにおける社会愛国主義的会議の欺瞞を、労働者に暴露せよ……二、Z連合に属し、しかもその目的に反して社会愛国主義者を手助けし、帝国主義が暴利をむさぼる平和を成就せようとするため社会愛国主義者と同居する諸君の党指導者を否認せよ……三、断乎インタナショナルな組織の代表とこの地で平和をめざす更なる闘争を協議するため、また動揺分子によってもたらされたZ運動内の分裂に対し革命的社会民主主義分子の結合を協議するため、ストックホルムへ代表を送るよう、……。

ここでこの声明に対する東独、ソ連史家の評価をせひみておきたい。ライスベルクによると、たとえそれが左派だけの会議を召集していないとしても、そのアピールは社会排外主義者ばかりか中央派との決裂への重要な第一歩だった。それ故にそれはコミンテルン前史にとって決定的な重要性をもつものだった、と^⑥。チュムキンもライスベルクによる評価を採るが、周知のようにレーニンの主張した左派だけの会議について、それは十分かつ明白に語っていないというマイナス面に力点が置かれている^⑦。両研究に先立ってコロレフも、第三インターの組織化をめざす左派だけの会議を召集する提案なしと記していた^⑧。一人ヴォロブツォヴァだけが、在外代表部は一七年春以来レーニンの第三インター即時創設の主張に沿って活動してきたとみ、七月一四日声明もその線に沿ったものだとした。そして、七月二〇日声明のマイナス評価としては、それがそれほど積極的なものではないとのコロレフの上述の見解があることを注で簡単に記しただけだった^⑨。従来全

くの無視か、あるとしても批判的評価ぐらいのものでしかなかった在外代表部の復権を計るため、かえってヴォロプツォヴァは歴史的事実を歪曲する結果になった。このレーニンと在外代表部の間にはだかる見解の相違こそ私が強調するところである。

この七月二〇日声明にはZ左派ばかりか、Z運動やその第三回会議との関係についての言明もない。ここで、この時期の在外代表部のZとのかかわりを知る手がかりとして私は八月一八日公表のラデク論文「岐路に立つZ」^⑩を取り上げたい。その執筆時は内容からみて七月末か遅くとも八月初めと推定される。

ストックホルム会議を批判してきた後、ラデクは「Z会議は、Zが第三インター、即ち行動のインターの礎石となろうとするのか、或いは革命的社会主義者と戦争に厭きた日和見主義者のための単に一時的な避難所で終わるのかを決定しなければならぬだろう」と二者択一をZに迫っている。後者の場合は、我々は直ちにそのインターのために自らの家屋を建てると。そして、「革命的国際主義的社会主义者と動揺分子とのブロックとしてのZは清算寸前である。」この動揺分子がZ連合内で多数であるなら、その連合はこれまでどおりであろう。が、彼らが少数となれば「その時初めてZは実際の行動の中心となりうるだろう。今こそ選択の時だ」と結ばれている。ここに新インター創設の一つの可能性としてZを踏み台とする道が表明されていることは重要だ。ただ、その二者択一を迫まるラデクの姿勢が強固に打ち出されているが、Z運動への彼のかかわり方には依然積極的なものが窺える。

この論文での見解から七月二〇日声明を振り返ってみるなら、中央派との決裂がどうの、左派だけの結集がどうのとの面だけでそれを評価すること自体一つの問題であると私は考える。つまり、この声明でレーニンの主張するZ左派の会議ではなく「革命的社会民主主義分子」の会議が召集されていることの中には、彼らのZ運動とのかかわり方が反映されていると考えるべきだろう。これに同じく署名したスウェーデン左派やテスニャーキのその方面の既述の見解まで考慮に入れるなら、この声明にZとの決裂という飛躍の萌芽をみることは無理である。

このように推察してみると、既述のレーニンへの六月一日の手紙で、ラデクがZとの断乎決裂を主張したことの解釈が問題となってくる。ポーランド史家の報告によると、ラデクは七月一六日にレーニンへ、七月初めから開かれた一連のZ派の会議についての報告を書き、そしてその手紙に『プラウダ』のために執筆した二論文を同封している。重要なのは、その一つが「Zは死んだ」という表題であったことである。それが届く頃既に七月事件下に『プラウダ』印刷所は閉鎖をくらしい、それは公表されずに終わった。表題しか知りえぬが、これは六月一日の手紙での主張と共通するものを予想させる。がしかし、ラデクのこれらの表現の前後の脈絡が捉えられない現状では、これらが彼のいかなる判断にもとづくものか、或いはその時期の在外代表部の一致した見解なのか明らかにしえない。

後年ラデクは自伝の中で「ペトログラドからウラジミール・イリイチが、今や第三インターを組織しはじめるときだとみて、我々に手紙で執拗にZとの決裂を要求してきた。我々はそれを時期尚早とみなして、それへの飛躍を決することができなかった」と書いている^①。これはその断乎決裂の主張から一八〇度の「転換」である。後述するが、ここにソ連史家はラデクの一貫性のなさをみ、そしてその非一貫性の中に左派会議が実現しなかったことの原因をみる。これを転換だと断定することは上述の理由から今のところできぬが、そのラデクの「転換」の中に左派会議挫折の原因をみようとする解釈には反論しなければならぬ。

この左派会議はついに実現しなかった。延期は許しがたい誤りだというレーニンの叱責^②にもかかわらず。なぜかラデクだけでなく在外代表部は自らの「革命的社会民主主義者」会議の実現を追求しなかった。その背後には七月事件後の状況への彼らの対応があったのでは、と私は推測する。

① ラデクらはストックホルム会議ポイノットをZが直ちに決議するよう強固に要請した。けれど、Zの全体会議のみがこの問題の決定をなしているとして、来たるべき第三回Z会議まで結論は持越されることになった。cf. Bahanoff, *Die Zimmerwälder...*, 373, 380-1.

② В. М. Волин, "Восстание большевистской партии, выходящее в Стрельбине в 1917 году", *Вопросы истории*, 1955, No. 4, 126; Воробйова, *Зарпиничное...*, 37; Воробйова, *Детельность...*, 124.

③ Z左派として署名した組織を挙げると、ロシア社会民主労働党(米)

中央委員会、ポーランド・リトヴァ社会民主党国内委員会、ブルガリア労働者社会民主党(チヌニャーキ)、スウェーデン社会民主左党、スウェーデン社会民主主義青年同盟。Balabanoff, Die Zimmerwalder..., 381.

④ 七月一日声明は、同月一日の Volksstimme (ゲムニッツ、S P D 板石) 一六四号と Volksrecht (チューリヒ、スイス社会民主党中央機関紙) 一六五号、そして二八日の Vorwärts (二〇四号に転載された。七月二〇日声明の方は、二七日の Politiken (スウェーデン左派) 一七二号と二八日の Vorwärts、そして『ゾニスガンデンツ』一四巻 [三二日] 22。Bopoflova, Detsreshnostr..., 123-4; Gankin/Fisher, 656.

⑤ Balabanoff, Die Zimmerwalder..., 381-8.

⑥ Reissberg, 246.

⑦ Tenkin, 584.

⑧ Koponen, 148.

⑨ Bopoflova, Zaprannnoe ..., 36-7.

⑩ K. Radek, "Zimmerwald am Scheidewege", Arbeiterpolitik, No. 33, 18. VIII. 1917, 250-2. など、しばしば "Zimmerwald auf

へ、七月事件と在外代表部

七月事件によるポリシェヴィキの半非合法化は在外代表部と党中央との連絡をとだえさせた。八月末か九月初めまで規則的な連絡は回復しなかった。^⑪ また、在外代表部への党中央の相当な財政援助も不可能になった。ポリシェヴィキが半非合法に追いやられた今、在外代表部は重要な役割を担わされることになった。^⑫ 七月事件について『コレスボンデンツ』に掲載されたいくつかの資料は当時他のいかなるポリシェヴィキの刊行物にも公表されなかったという。^⑬

七月事件の端緒となった一六 [三三] 日夜から一七日にかけてのペトログラードの蜂起の報道は、一八日早朝にストック

dem Scheidewege" という表題で Jugend-Internationale, No. 9, 1. IX. 1917, 2-4. に掲載された。またチューリヒからのメンソット [未見] で発行された。

⑪ 注記すれば、七月二〇日声明とこの論文との間には、次節で扱う七月事件の波紋が介在する。前者は既に一七日にチヌニャーキのキルコフが署名している事実 (Teopn KipkoB, 131) から明らかに七月事件以前のものである。けれど、この声明が七月事件報道後の七月二七日と三二日のそれぞれスウェーデン左派と在外代表部の機関紙に掲載されたことからみて、両者における在外代表部の見解は同一線上で捉えようといえないうちのと考えよう。

⑫ W. Najtus, Polacy w rewolucji 11917 roku (Warszawa, 1967), 222.

⑬ Radek, Autobiographie, 337.

⑭ ⑮ 三四五 (八月三〇日、中央委員会在外代表部へ)。この手紙はインランドの社会主義者 K・ウィークによって仲介されたのだが、レニンから彼に手渡されたのは九月七日だった。B. H. Jemm, Biograficheskaia xronika, IV, 329, 330; Futrell, 160. この時既に第三回大会議は始まっていた。

ホルムへ伝わった。在外代表部と当地に派遣されてきていたコロンタイは直ちにその対策を協議した(コロンタイは危険を冒して帰国の途につき、二〇日に到着するやいなや逮捕されることになる)。^⑤『コレスポンドンツ』は二二日の一一号から「ペトログラードの出来事」の報道を開始し、毎号それは続いていく。^⑥八月五日の一五号には「ペトログラードでの七月事件の国際的教訓」を掲載し、革命的プロレタリアートの国際的団結を声高に呼びかけ、ロシア革命へのロシア社会愛国主義の裏切りや、日和見主義と社会排外主義の国際的な性格を暴露した。^⑦

七月事件はまた、以前からくすぶっていたハネツキに対するドイツ政府からポリシェヴィキへの金銭援助の仲介者としての中傷を表面化させた。在外代表部はその中傷への批判をかなりの労力をさいて展開していく。^⑧

けれど、この七月末から九月の第三回Z会議までの肝心の在外代表部の活動の方針と実態が今なお明らかでない。^⑨ただわかっているのは、この時期彼らが主要な配慮を独自の「革命的社会民主主義者」会議ではなく、第三回Z会議のための準備へと向けていったことである。『コレスポンドンツ』は九月最初の二週間だけ、第三回Z会議への準備と新しく『ボテ』を刊行する準備のため発行されなかった。彼らはまさにこの時期、単にニュース伝達だけでなく情勢分析と革命的理論的考察を兼ねた新たな機関紙を発刊することになった。彼らはその創刊号の巻頭論文「インタナショナルへ」^⑩で自らの任務を掲げているが、そこにこそ、なぜ彼らは自ら召集した会議の完遂を果さなくなったのかということに対する私の推察の一論拠をおきたい。

彼らの任務として、まず一、ロシア革命の情報のインタナショナルへの伝達、二、ヨーロッパ同志との間の橋渡し役を務めることが掲げられているが、これらは在外代表部創設当初からのものである。そしてこの次が重要なのだが、三、我々は三ヶ月の間『コレスポンドンツ』を刊行してきた。そしてそれは予想以上の普及をみた。がしかし、ロシアにおけるわが党の迫害や反革命勢力の抬頭は、より深い内容をもつ機関紙の発行をもってより広汎な層へ訴えることを不可避免的にしている、と。ここに発刊の真意がある。そして論文は、党中央から遠く離れしかも連絡が困難なことからして、機関紙

での個々の判断についての責任は我々にだけあることは言うまでもない、との言明で終わっている。^⑫

七月事件がもたらした情勢の変化についての在外代表部の反応は敏感であったし、事の重大さへの認識は重い。彼らにとってロシア革命の防禦は急務だった。そのためにも彼らは敢えてこの時期にZとの葛藤を引き起こしかねない「革命的社会民主主義者」会議召集に踏みきれなかったのではなからうか。かかる状況なればこそ、Zの利用価値が改めて彼らに強く意識されるに至ったのではなからうか。或いは、前々節でみてきたように在外代表部の各国社会主義者左派との接触が思うように進展しないとの当事者自身による判断があつて、それもそこに働いたかもしれない。七月二〇日声明の結びは、「この檄を再版せよ。我々に諸君の我々のアピールに対する同意をよこしてくれ」だった。^⑬前述のように、この声明はドイツ左派をはじめかなりの層に知れわたっていたと考えられる。にもかかわらず、それへの左派の反応が、つまりその会議への派遣の動き自体が今日史料的に『アルバイター・ポリティーク』においても) 見い出されない。

ここで、レーニンの七月事件を経てのインター問題についての判断を想起してもらいたい。それが在外代表部のそれと対照的であるからである。事件後レーニンは左派会議の即時召集を増々声高に主張していった。が、在外代表部の反応はレーニンのそれと逆方向に向つた。その逆方向への彼らの反応をもう少しとどめてみることにする。

九月二二日の『ポーター』二号では、「その〔第三回Z〕会議で採択された実践的な決議——我々はそれについての公式報告が〔ISKから〕出る前に報告することはできぬが——は、我々にその会議から、この貧困証明書にもかかわらず離れることを許さなくした」とまで書かれている。^⑭ 続く十月一三日号でも、Z運動の今後の前進になお期待をかけ、「Z左派は、〔Z〕右派が左の方へ歩み出ようとする瞬間に彼らと分離することができなかった」と。もちろん、この進展への樂觀を戒めているが。そして、この既に十月半ばの段階で、「平和をめざす闘争の本分とプロレタリア革命の本分にZの自覚的分子が一番よく献身している」と書き、Z諸党がそのZ決議を遂行するかどうかにZの運命はかかっている、と表明していることは重要である。^⑮

コロレフはこれら二論文に、在外代表部が「ストックホルムからの平和宣言」の意義を明らかに過大評価したことの論拠をみる。そして、それが誤りであることは直ちに明らかになったとして、その宣言がついに十月革命前に公表されなかったという例証を持ち出す^①。が、ラデクら在外代表部は再三にわたってその宣言の公表をISKに強く要求した^②。彼らにとってロシア情勢の緊迫化は、宣言中の国際的な大衆ストライキのスローガンの実現を急がせた。一方でのかかる断乎たる要求、他方での上述のISKによる公表まで待つとの公の表明という二面的な彼らの態度をいかに評価しうるであろうか。この点について私はラデク伝の著者ラーナーの興味ある見解を取り上げてみたい。

ラーナーは、なぜその宣言が最も有効力のあるはずの『ポーター』ではなく、ポリシエヴィキ管理下の一フィンランド新聞に十月革命前夜に公表されたのかという問題を提出する。そしてそれへの彼の解答は、ラデクがZへの忠誠による拘束を感じたからではなく、在外代表部を危険にさらすのを躊躇し、またその宣言を早計に、或いはポリシエヴィキの機関紙にそれを公表することの正式の承認なしに公表することによってレーニンとトラブルを引き起こすことを躊躇したからであるとした^③。

この「危険」を我流に解釈すると、全Z派の同意なしに公表した場合、銃後の大衆ストライキという事が事だけに国際的な統一行動でなく一方だけが実行することによって引き起こされる危険性をISKらは最も恐れたのであり、だからこそ無断でそれを在外代表部が公表することは危険窮まりない暴挙になりかねなかった。上述の『ポーター』論文を素直にとれば、Zの今後の前進への期待から導かれるZへの「忠誠」による拘束もそこに働いたかもしれない。がここで強調したいのは、彼らによる無断公表が彼らの組織を危険にさらしかねぬ実状こそ彼らの当時の力量であったことである。

① Bopodiona, Zapiski..., 33

② ③④⑤参照

③ Cf. J. Hanckiewicz, "Od 1903 roku..." [1927], Polacy o Leninie.

Wspomnienia (Warszawa, 1970), 15.

④ Borin, 126

⑤ Kozłowski, Iz mojej kuzni..., 274-6

⑥ ⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

A. Reisinger, "Die ersten bolschewistischen Pressenorgane in

deutschen Sprache. Die „Russische Korrespondenz, Prawda“ und der „Bote der russischen Revolution“, BzG, 1974, No. 4, 640.

⑩ Воровцова, Девгильность..., 79-81.

⑪ 七月二日(最初の批判声明が書かれた日)。“Das Komplott gegen die russischen revolutionären Sozialdemokraten”, Arbeitpolitik, No. 31, 4, VIII, 1917, 237.

⑫ 十月革命二周年を記念した論文「ヴォロコフスキーは、当時ストットホルムが果した国際政治舞台の中心としての重要性に触れるが、今は語の場所ではない」といふことにそれは語られなかった。B. B. Воровский, Статьи и материалы по вопросам внешней политики (M., 1959), 184-5. それはこゝに在外代表部メンバーが当時の彼の活動を回想する時沈黙をなしたのである。

⑬ Воровцова, Девгильность..., 44.

⑭ “An die Internationale”, Bote..., No. 1, 15, IX, 1917, 1.

⑮ 七月事件後在外代表部は「あるレーニンの『「ラウダ」論文を無署名で読んだためその著者を知らぬまま転載し、それをレーニンの他の論文と分離させて後者を「ロンガンダ」したことをもめた。Ю. И. Воровцова, “В. И. Ленин и Заграничное бюро ЦК РСДРП(б) в 1917 г.”, Вестник Ленинградского университета, 1964, No. 14, 57.

⑯ Balabanoff, Die Zimmerwälder..., 388.

⑰ “Die russische Sozialpatrioten und Zimmerwald”, Bote..., No. 2, 22, IX, 1917, 10. 引用中の「実践的な決議」は「カムランホルムからの平和宣言」であり、その内容とそれが採択される経過

二、在外代表部の活動の意義

これまで在外代表部の特に二つの方面での活動について検討してきたが、それに関する限りでの在外代表部への評価を

(並ぶにやせの孕む問題等)にこゝに Balabanoff, Die Zimmerwälder..., 402-6; Balabanoff, Erinnerungen..., 168-9; Baranofanona, 152-5. その宣言は全会議として初めて「社会主義プロレタリアートによる平和の招来と民族解放のための万国における巨大な共同闘争の始まり」として「共同の国際的大衆ストライキ」を呼びかけたものの、危険性を孕む事の重大さの故に会議に出席しえなかった党を含む全諸党の承認を得るまじ、その公表はおしひかえらるることになった。こゝに以下触れるその公表をめぐる派閥の対立が生ずる。

⑱ “Die dritte Zimmerwald Konferenz”, Bote..., No. 5, 13, X, 1917, 8-9.

⑲ Koponen, 154.

⑳ Balabanoff, Erinnerungen..., 171-2; Baranofanona, 159; Balabanoff, My Life..., 169; cf. Balabanoff, Die Zimmerwälder..., 232-3.

㉑ Balabanoff, My Life..., 170. この公表の日時と誌名は未だ明らかでない。そのため詳細は省くが、その宣言(中、最重要性をもち大衆ストライキのモールの項が削られる)全文が最初この日の誌に誰の手によつて公表されたかどうも確定が困難になっている。今は、その宣言が在外代表部の機関紙に公表されなかったという事実にならざるを待たなくてはならない。

㉒ W. Lerner, Karl Radek. The Last Internationalist (Stanford, 1970), 64. 傍点引用者。

下してみたい。

在外代表部は当時ポリシエヴィキの殆ど唯一のヨーロッパへの窓口であった。在外代表部の機関紙に掲載されたロシア革命の情報は各国社会主義者に限らずブルジョワ新聞にも広く転載された。^①しかも、ロシア革命についての歪曲された報道が西欧に蔓延した当時の状況を考えると、在外代表部の果たしたインフォメーションの役割は高く評価される。^②

単なるインフォメーションが彼らの任務であったわけではない。自らの刊行物を通じていかに革命的インタナショナルナリートを糾合するかが彼らの使命だった。彼らの刊行物の普及こそそのための前提となるはずだった。転載という形での普及度はヴォロブツォヴァの強調するところである。彼女は、在外代表部からの情報は「殆どあらゆる外国の新聞に掲載された」とのハネツキの後年の言明を完全に確証されるとして引用する。更に、彼女は各国各層の新聞に広く転載されたというその事実から無謀介に在外代表部の影響力の大きさをみようとする。^③また彼女によると、転載した新聞が左派であれば即、両者の間に密接な「関係」があったということになる。こと影響力という問題になると、その接触の実質的内容が問われるのはいうまでもなく、それこそ私が検討しているものである。

この影響力の実証は困難を極める。ここでは、その前提となる在外代表部の刊行物の普及について否定的評価に傾く傍証を二・三挙げるに止めたい。

まず、ヴォロブツォヴァには何らの言及もないが、在外代表部の両機関紙の発行部数が不明ということである。^④『コレスポンデント』の方は謄写版印刷だったため当然ながら発行部数は限られていた。そして、同誌の仏語版がスイスのギルボーのもとで出されたというが、未だにその発見の知らせを聞かぬ。次に、在外代表部の印刷物でドイツ政府、軍当局が押収した四点だけが東独の代表的史料集に収録されている。^⑤注意すべきは、いずれも十月革命直後に出された檄で、革命前のものの押収が見い出せないことである。しかも、ドイツ当局による押収は一七年一二月半ば以降のものであり、その時既に在外代表部の活動は実質上終わっていた。(十月革命が報ぜられるや党指令をまたずにハネツキが、そして後を追ってラデ

クがロシアへ発った。^⑦ 在外代表部の両機関紙の終刊号は、『コレスボンデンツ』が一月三〇日の三三号、『ポータ』が同月二八日の一
号。^⑧

続いて、在外代表部のもう一つの活動、「革命的社会民主主義者」会議召集について。その会議が実現せず、またZからの離脱も実行されなかった原因としてソ連、東独史家が挙げるものは一致している。即ち、中央委員会の若干のメンバー（ジノヴィエフ、カメネフ）と在外代表部のメンバー（ラデク）の一貫性のない日和見主義的な態度である。^⑨ ヴォロプツォヴァは当然のこととして帝国主義政府による左派派遣への妨害を加えている。^⑩

まず後者の検討から始めると、この点に関しては既述したように問題はそれ以前にあった。つまり、その会議への派遣の動き自体が見い出されなかった。またドイツについては、第三回Z会議にスバルタスから唯一参加することになるケーテ・ドゥンカーですら六月末の段階で既に渡航許可を得ていた。（けれど彼女は、既にオランダ・スカンジナビア委員会やISKと会談すべくストックホルムへ赴いていたUSPD代表の動きに対して自らの出発の緊急性を感じていなかった。）^⑪

前者については、まず彼ら史家が指弾しているのが上記の三人だけであることを問題にしたい。既に検討してきたように、ジノヴィエフの見解は中央委員会が十月革命まで採り続けたものでもあったし、在外代表部についてもラデクだけが異なる見解をとったという形跡は見い出されない。ポーランド左派の中で大戦中最もレーニンとの協力関係がスムーズであったハネツキですら、彼のレーニン支持は一義的には組織政策上のものだった。^⑫

ヴォロプツォヴァはその会議失敗の原因としてラデクらの態度を挙げたすぐ後に続けて、しかし、在外代表部がZの諸会議で諸対立を糊塗することなく、一貫した革命的見地を述べ、Z諸党をこの見地へ引き入れようと試みたことは強調しなければならぬと記す。そしてその例証として、当時Zの諸会議に同席したフィンランド社会主義者Y・シロラの回想、「彼らにだけ明確な方針と強力な主張があったことは明白だった」^⑬を挙げている。^⑭ シロラはそれ以上の言及をしていないが、彼の印象は確かに事実に沿うものだと私は考える。論証は次稿に譲るが、Zの諸会議での頑固なまでの彼らの主張、

とりわけ第三回ノ会議でのラヂオの運動全体にかかわる根本的な問題提起の④意味するところは深い。

決定的な問題は在外代表部メンバーにあったのではない。それは在外代表部の、更にはそれを窓口としたポリシエヴィキの当時の力量そのものにかかわる問題であった。

- ① それらの新聞を記すに、掲載回数やページ数は五〇回、六〇回を越えず
② Arbeiterpolitik 及び Работнически вестник の他は Arbeiter-Zeitung (新社会民主党中央総議報) Leipziger Volkszeitung (Dの前身) Vorwärts, Volksstimme, Demain, Politiken, The International (新社会民主党總報) Social-Demokraten (ハンタマニエの前身) ノルンベルク新聞 (ノルンベルク) Berliner Tagwacht, Norddeutsche Allgemeine Zeitung, Vorobiova, Демельность... 105-6. (ノルンベルクの Kampf 号)
- ③ Cf. Ф. Платтен, "Возращение Ленина", О Ленине, 162.
- ④ Vorobiova, Демельность..., 104-9.
- ⑤ Воллин 127.
- ⑥ Cf. Карлинер, 384.
- ⑦ Die Auswirkungen der Großen Sozialistischen Oktoberrevolution auf Deutschland (Berlin, 1959), 845, 885, 1033; cf. 1141.
- ⑧ Hanecki, 16-8; Radek, Autobiographie, 337-8.
- ⑨ Королев, 144, 150; Reiberg, Lenin..., 226, 239-40; Темкин, 579-80; Vorobiova, Заграничные..., 37-8; Vorobiova, Демельность..., 125-8; Карлинер, 370.
- ⑩ Vorobiova, Демельность..., 125.
- ⑪ W. Imig, "Zur Hilfe W. I. Lenins für die Schaffung einer marxistisch-leninistischen Partei der deutschen Arbeiterklasse (Februar bis Oktober 1917)", Wissenschaftliche Zeitschrift der Ernst-Moritz-Arndt-Universität Greifswald, 1966, No. 2, 126.
- ⑫ Cf. G. W. Strobel, Die Partei Rosa Luxemburgs, Lenin und die SPD, Der polnischen "europäische" Internationalismus in der russischen Sozialdemokratie (Wiesbaden, 1974), 534. (キエフのことは第一回ノ会議を前記の「新ハンター創設の要求を原則として保持するがそれを会議に最後通牒として提示すべきではない」との見解が「その」ノ会議で採択された決議の全幅の支持表明が知られている。Я. Г. Темкин, "В. И. Ленин и образование Интернациональной левой", Вопросы истории КПСС, 1965, No. 8, 23; Ягможаева, 187-8. 後者は新語の「ハンター」の決議が「その」議案を「その」の賛成と異なるものではない。
- ⑬ Ю. Сирова, "Воспоминания о Ленине", Пролетарская революция, 1930, No. 1, 80.
- ⑭ Vorobiova, Демельность ..., 128.
- ⑮ Cf. Lademsheter, I, 458-9.

五 結 び

ボルシェヴィキの各国社会主義者との接触工作を殆ど一手に担っていた在外代表部は、積極的にその接触を試みていたのであり、また革命的社會民主主義者の糾合を計るための會議を召集もした。が、その接触の實質的内容については、限られた史料からの論証だが積極的評価を下しえないものだった。またその會議については、レーニンの火のような催促をしても在外代表部が当時それを召集する土壤も力量もなかった。

土壤というは、Z左派間のZ観にかかわることであったが、彼ら左派にはレーニンの新インター像が皆無だったこと、そして彼らはZ以外の會議をめざしはしなかったことである。力量とは、まずその召集アピールへの各国左派の反応が見い出されなかったことに窺われる。がそれ以上に、七月事件後の情勢の困難化が在外代表部を改めてZにかかわらせていたのではないか、そして、そこには彼ら自身による自らの力量への判断があったのではないかと私は解釈した。

ここで、Z左派の新インター像についてまとめたい。実は、Z運動はその出発当初からインター運動における自らの運動の位置付けを規定しえずにきた。この運動はあくまで目下正常な機能を果しえずにいる第二インターの補助であり、ISKはその臨時機関であるとみなすグリュムのな右派もいた。がZ左派は、というと、彼らはZを介しての第三インター創設をめざした。彼らは(レーニンのいう「第三インター」が現実化していない状況で)まさにISKを当時唯一の現実的可能性をもった「インタナショナルの中心」(コンタインの用語)とみていたのである。彼らは第二インターの事実上の瓦解という共通認識から出発した。^①私は本稿で、テスニャーキやフィンランド社会民主党のBSI脱退、ISK加盟の決議を記してきたが、彼らのその態度表明の中に当時における一つの積極的な意義をみる。一七年、そして一八年と、ISK機関紙は自らの組織への各国諸党の加盟を間断なく報じている。^②

周知のように、一九九年以降國際社会主義運動はレーニンの第三インターと復興された第二インターを兩軸として展開さ

れていくが、ここで一言しておけば、(大局的には、十月革命後ロシア・ボリシェヴィズムはいつ、いかにして実質的な影響力をヨーロッパ社会主義運動に及ぼすようになるのかという問題にそれはかかわると思うのだが)ボリシェヴィキソヴエト政府による新インター創設の動きの最初の実質的成果は一八年末までなかった。この「空白」の期間こそISKを中心としたZ運動の存在理由があった、と私はみている。

最後にレーニンの即時離脱論について私なりの総括をしたい。彼の論は、最初に記したようにグリムらとの決定的な対立に端を発した。そして、彼らばかりかZ右派(Zの枠をはずせば中央派)全体が「思想的にZを葬り去」ったとレーニンは捉えた。^③彼のZ破産宣言が思想的にまず措定されたことに注意したい。だからこそ、彼は国際社会主義陣営の諸潮流の区分を重視した。彼によると、社会排外主義者、中央派そして国際主義者という区分になる。そして、レーニンにとってこの論は直ちに次の論、即ち新インター即時創設論へとこれまた思想的に連結される。既述したように彼にとっては、新しい革命的プロレタリア的なインターは「国際主義者たち」によって「すでに創立されている」ということになった。彼には、Z即時離脱から新インター創設への移行は左派会議が開かれるや直ちに実現しうるものとの楽観があった。^④新インター創設の可能性への過大な楽観を背景としたレーニンの極めて敵しいZからの即時離脱論こそ、現実の国際社会主義左派運動のプロセスに離反するものであった。^⑤

レーニンは中央派、とりわけカウツキー主義者との思想的決裂にこだわりすぎた。それに比べて、左派との理論的交渉(特に新インター問題について)のイニシアティヴはレーニンによって決してとられることはなかった。それは在外代表部に委せられた。この左派間の理論的交渉という取り残された問題こそ、一九年の第三インター創設時に、一七年時と全く異なる背景の下に初めて実質的に提示されることになる。

ボリシェヴィキによる第三インター創設運動が現実にはレーニンの主張するZからの離脱を踏み台として大きく飛躍したのなら、彼の論への評価は全く変わってくるだろう。が、ボリシェヴィキによるその実際の創設はそのコースをたどらな

かった。

ボリシェヴィキにとつて、Zは利用価値こそあれ決して桎梏となるようなものではなかった。四月協議会でレーニンが、我々は情報目的だけのためにZにとどまるべきだと述べた時、ジノヴィエフの、もしZが「役に立たぬところ」ならば何故に情報目的でとどまるのかとの反論があるが、このレーニンの主張にはZの利用価値が意識されていたがための配慮が読みとれる。更に六月一〇日に、彼は「ただ情報を得る目的のみZにとどまることにすれば、われわれは、第三インターナルを創立するための行動の自由を一挙に獲得するわけである(しかも、それと同時に、Zの利用を可能とするような事情が生まれれば、それを利用することができる)」とまで書いていた。^⑥

四月協議会でのジノヴィエフの、「Zはブロックの性格からZが我々を自由に活動させ、そして我々が自らのインター再興の歩を進めることができる」との既述の発言があるが、確かにこれはZ運動の基本的な性格を言い当てている。^⑦ 故にこそ、ボリシェヴィキは十月革命後もZを清算する必要性を緊急に感じはしなかった。

① バラバノフは、「インターは何であつてはならぬ」、即ち第二インターのようになってはならぬという批判的契機からZは出発した、と後に回想している。Balabanoff, *Erinnerungen...*, 274.

② I. S. K. *Nachrichtendienst*, No. 8, 12, VI, 1917, 3-5 (オスマニヤキ) No. 10, 22, VI, 1917, 1 (フランクフルト)。これでZへの正式加盟は二五と記されている。No. 19, 16, VIII, 1917, 6 (同上) No. 39, 1, IV-V, 1918, 12 (ボスニア・ヘルツェゴヴィナ社会民主党の加盟。ノルウェーの加盟の動きについての報道) No. 42, 15, VI, 1918, 16-7 (デンマークの創設された二つの新党両方とも加盟決議をした問題について) cf. *Der Kampf*, *Sozialdemokratische Monatschrift*, No. 7, VII, 1918 [Wien, 1971], 512-3.

③ 三〇四 (二月十七日、ロンドン)。

④ ②七四一五 (六月一〇日、『わが国の革命におけるプロレタリアートの任務(プロレタリア党の政綱草案)』あとがき)、③八一三 (六月一日、ラダク) 参照。

⑤ このレーニンの論調の変化に触れておきたい。十月革命前夜に執筆された『党綱領の改正によつて』の中にその変化は読みとれる。即ち、「もちろん第三インターナルの創立というものを形式的に理解してはならない。一国だけでもプロレタリア革命が勝利をおさめるか、あるいは戦争がおわるかするまでは、さまざまな国の革命的・国際主義的諸党の大きな会議を召集する仕事を急速に成功裏に前進させることを期待することはできない。だうし、新しい綱領を正式に確認する仕事でそれらの政党の同意を期待することはできない。だうし」と。^⑥一七一。ただし訳文は要された。Полн. собр. соч., XXXIV, 377.

傍丸引用者。) ここには、この後に続く文章からみてもポリシエヴィ

キの権力掌握を目前にしてのレーニンの「自信」が窺える。

⑥ Селван (Амперскан)..., 233.

⑦ ②七五。

⑧ この性格の中にZ運動のプラス・マイナスがあった、と私はみる。

この点と少し前に記した「空白」期におけるZ運動の存在理由を含めて、この運動の総括は次稿「ロシア二月革命勃発後のツインメルヴァルト運動、一九一七—一八年」で試みたい。

(京都大学大学院博士課程

)

This article aims, by examining the newspapers, magazines, political pamphlets, biographies as well as the unknown sources, to investigate the circumstances under which the political power of the army grew strong while that of the political party became weak, and the movements of the royal court in those days.

The Bolsheviks and the Zimmerwald Movement :
March-November 1917

by

Akito Yamanouchi

The Zimmerwald movement, which had started as the international anti-war socialist movement in September 1915, newly developed with the sudden change of international situation after the Russian March Revolution. In order to study comprehensively the movement after 1917, it is important to investigate Lenin's argument that Bolsheviks should secede from the Zimmerwald movement immediately. He thought that Zimmerwald had become bankrupt and that in his idea the Third International had been founded by the real internationalists. But in those days none of Bolsheviks supported Lenin's argument. Besides the foreign representative of Bolsheviks in Stockholm, who was undertaking alone the duties of contacts with the internationalists and whose activities held the key to the concentration of left-socialists and the foundation of the Third International, also did not support Lenin's. Then the foreign representative regarded the Zimmerwald movement as the only possibility for the foundation of a new International. It implied the significance of the movement in the international left-socialist movement and the weak effect of the foreign representative, further, of Bolsheviks on the left-socialist camp.

Note pour étudier les grattoirs dans les industries
du *Sendoki* (Japon)

par

Ichiro Yamanaka

Nous sommes en train d'établir la typologie (techno-morphologique)